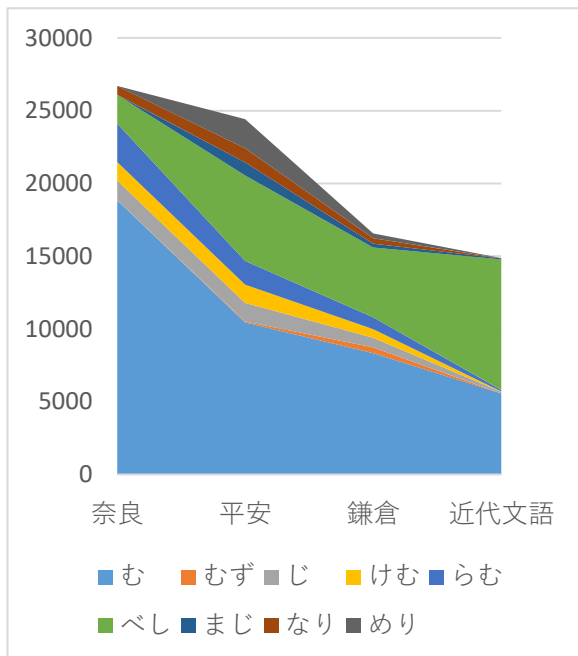


## 通時コーパスに見るモダリティ形式の変遷

小木曾智信（国立国語研究所）

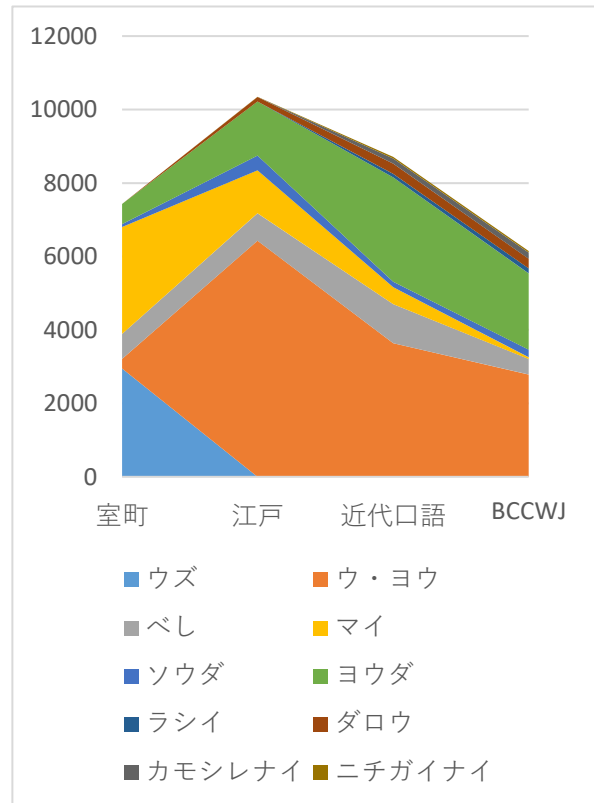
『日本語歴史コーパス』(CHJ)の構築が進み、未構築の重要な資料が残っているものの、上代(奈良時代)から近代(明治・大正)まで一通りの時代をカバーできるようになった。本発表では、このコーパスを使って、モダリティを担う主要な形式がどのように使われてきたのか通時的に見渡したい。個々の用例や形式の意味・用法に踏み込んだ議論は困難だが、各時代における使用実態とその推移を、コーパスサイズを考慮した調整頻度で概観する。各助動詞が叙法として多様な意味・用法を担う古代語から、個々の分析的な形式が特定の意味・用法を担う近代語へというモダリティの表現方法の大きな変化を使用頻度の上で確認することになる。

この変化の結果として、文語(擬古文)における助動詞によるモダリティ表現の破綻が確認された。すなわち、中世以降に古代語の多様なモダリティ助動詞が使いこなせなくなり、助動詞の使用そのものが減って、もともと頻度の大きい「む」「べし」に用例が集中していくこと。そして近代文語文では大部分が「む」「べし」となり、代わりに口語の複合辞の文語版のような形式で表現されるようになることである。これは口語におけるモダリティ表現の方法を、文語の形式でなぞることで起きた現象だと考えられる。



文語助動詞の頻度 (WPM\*) 推移

※100万語あたりの出現頻度



口語助動詞類の頻度 (WPM) 推移